

本学学生の「子どものころの思い出の食べ物」調査報告

A Survey of the Memorable Foods in the Childhood for the Student of the Hosen College of Childhood Education

可野倫子

KANO, Noriko

キーワード：食育 思い出の食べ物 保育者養成

I. はじめに

食べることは生まれたその日から始まる行為である。乳汁を飲むことから始まり、食べ物を食べられるようになるまでには、咀嚼、味覚、嗜好等の食行為の発達にはその時期にふさわしい適切な食べ物と調理、そして一緒に食べる人間の存在は不可欠である。

「保育所保育士指針」¹⁾では、初めて厚生労働大臣告示となった2008年3月の改定から「食育の推進」に関する事項が組み込まれ、保育における食育の位置づけが明確化されている。それに先立ち、「楽しく食べるこどもに～保育所における食育に関する指針～」報告書が取りまとめられ、2004年3月に都道府県および指定都市、中核市へ通知された。その目標は「現代を最もよく生き、生涯にわたって健康で質の高い生活を送る基本として『食を営む力』の育成にむけ、その基礎を培うこと」である。これらの実践の場では「共食」、「栽培」、「料理」など具体的に体験できる内容が重要となる。

そこで、本調査では本学学生が子どものころにどのような食の体験をしてきたかを把握し、保育者としての食育実践活動の基礎とする。

II. 調査方法

調査対象は本学保育学科1年生99名である。調査方法は質問紙を配布し、学生が、自由記述と、学生間のグループワークを実施した。質問紙の記述は「あなた自身の子どものときの思い出の食べ物とその理由」である。グループワークは、各自の記述をもとに「記述内容で共通していること」に視点を当てた。調査期間は2012年10月～12月である。分析方法は質的研究方法²⁾を参考に記述の内容に沿ってコーディングをし、傾向を把握した。

こども教育宝仙大学 非常勤講師

III. 調査結果と考察

1. 対象者の属性

調査の対象者は、男子学生23名、女子学生76名の99名である。質問紙の回収率は70.0%（男子学生15名、女子学生60名）、有効回答者数は75名である。記述内容から全回答数は110件、そのうち、104件（94.5%）を有効回答数とした。

2. 内容の概要

記述内容の「子どものときの思い出の食べ物とその理由について」に「特にない」、「思い出せない」と記述した者は2名（男子学生1名、女子学生1名）であった。複数の思い出を記述した者は19名（男子学生2名、女子学生17名）であった。ゆえに、有効回答数104件のうち、「特にない」、「思い出せない」が2件を除くと、「思い出の食べ物」の記述数は102件である。

思い出の食べ物は記述から「料理」、「手作りの菓子・パン」、「市販の菓子・パン」、「野菜」、「弁当（手作り）」、「魚」、「肉」、「外食」とし、それらに該当しにくいものを「その他」と分類し、図1に示した。「料理」（37.3%）は記述によるとすべて「手作りの料理」であり、「手作りの

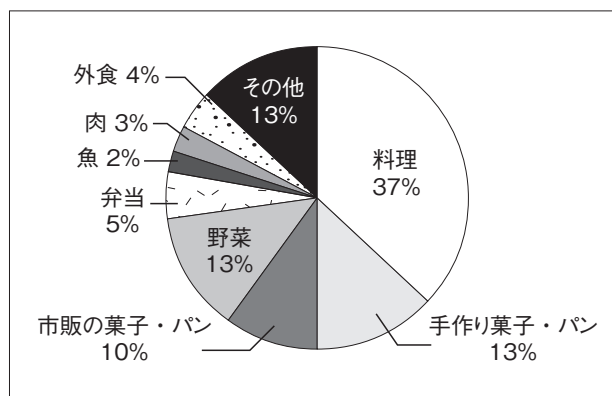


図1 思い出の食べ物 (N=102)

菓子・パン」(12.7%)、「弁当(手作り)」(4.9%)の食べ物が54.9%と半数を占める。

分類項目の「料理」(38件)に記述されている料理名は、「カレーライス」が6つと最も多く、次に「スパゲッティ」が4つ、「ハンバーグ」、「オムライス」、「から揚げ」が各3つ、「チャーハン」、「雑炊・おじや」、「炊き込みごはん」、「餃子」、「すいとん」が各2つであった。各1つは「天ぷら」、「みそ汁」、「栗きんとん」、「かぼちゃの煮物」、「グラタン」、「ピザ」、「ロールキャベツ」、「オムそば」であった。これらの料理を「洋食」、「和食」で分類すると「洋食」系は59.5%、「和食」系は27.0%、「その他」(餃子、チャーハン、オムそば)は13.5%となる。「洋食系」の料理が半数を示している。

「手作り菓子・パン」の記述は「ケーキ・洋菓子」が6つ、「和菓子等」が4つ、「パン」が3つであった。「ケーキ・洋菓子」、「パン」と洋風の菓子、パンが7割を示していた。

「思い出の食べ物」の半数を示した「料理」、「手作り菓子・パン」、「弁当」のそれぞれの理由について、すべての学生が体験を書いていた。その中で感情表現の記述をしていた者は「料理」が78.3%、「手作り菓子・パン」が92.3%、「弁当」は60.0%といずれも半数以上である。

3. 感情表現の内容について

感情表現のあった記述から「良い思い出」、「嫌な思い出」、ないものを「その他」と分類した。「良い思い出」が57.8%、「嫌な思い出」が17.6%、「その他」が24.5%であった。

先の分類別に記していくと、「料理」には「良い思い出」が約7割(29件)あった。主な理由には①一緒に作る体験が9件、②作ってくれた思い出が11件である。①一緒に作る体験には「母親と一緒に作って楽しかった」、「家族と一緒に作って楽しかった」、「家族みんなで作って美味しかった」、「友達と初めて作ったので楽しかった」、「地域の人に教わりながら作ったことが楽しかった」など、「楽しい」、「美味しい」書かれている。②作ってくれた思い出からは「苦手なものを食べられるように作ってくれた」、「家族代々の味を継承して作ってくれている」、「他にはない味とかわいい盛り付けで嬉しい」などから「嬉しさ」、「感謝」が書かれている。

「手作りの菓子・パン」の「良い思い出」の主な理由は①一緒に作る体験が6件、②作ってくれた思い出が4件である。①一緒に作る体験には「母と一緒に作って楽しかった」、「友達と一緒に作った」、「初めて作って、それがきっかけで作ることが好きになった」など、体験したことが「楽しい」ということだけでなく、体験から「行動のきっかけ」となっている。また、②作ってくれた思

い出は「どこにも売っていない」、「作ってくれた菓子が美味しく、自分でも作ってみようと思えるようになった」、「学校から帰ってくるといつも手作りのパンがあった」など、「美味しい」、「嬉しい」、「特別なもの」などが書かれている。

「弁当(手作り)」は3件、いずれも②作ってくれた思い出が「良い思い出」である。「アトピーで給食を食べることができないため、学校の献立に合わせた弁当を毎日、作ってくれた」、「遠足の時のお弁当」、「毎日かわいらしい弁当を作ってくれた」から「感謝」、「嬉しさ」が書かれている。

「市販の菓子・パン」では「泣き止まない自分に一口、親戚が菓子を入れてくれたことで、泣き止んだ。今でも好きな菓子である」、「おまけつきの菓子を母にねだって買ってもらった」、「あまりの酸っぱさにびっくりし、その時一緒にいた友達と会うといつも話題になる」であった。

「野菜」は、「収穫の体験と喜び」、「嫌いな野菜を克服できた喜び」、「友人が嫌いな野菜が自分は食べられたことの嬉しさ」であり、「魚」は、「刺身の作り方を父親から教わり、作って食べて美味しかった」といずれも体験したことやできたことの「嬉しさ」、「喜び」、「美味しさ」が書かれている。

「外食」では、「苦手だったものが友人と一緒に食べることができた」と書かれている。

「その他」には「地元の魚を毎年食べに行く」、「父親が食べているものが美味しそうであった」、「父親が用意した市販の寿司パックを弁当に持たされ、食べたくなかったが、幼稚園の先生が『先生も食べたい、美味しそう』とずっと傍で言ってくれた」などがある。

「嫌な思い出」の理由は17件である。先の分類別に記すと、「弁当(手作り)」は「シンプルすぎて恥ずかしかった」というのが1件ある。

「市販の菓子・パン」は4件、「食べた後に気持ち悪くなってしまった」、「菓子が突っかかってしまった」などと書かれている。

「野菜」は4件、「のどや鼻に詰まらせてしまった」、「苦手な食べ物を食べるように強要された」などである。

「魚」は「骨がのどに突っかかってしまった」が1件である。「肉」は2件、「突然食べられなくなった」、「食べた直後に嘔吐し、食べられなくなった」の体験に「食べられないことで辛い思いをした」、「気持ち悪くなる」と書かれている。

「外食」では「ラーメンを食べた後、気持ち悪くなったため食べられない」が1件ある。「その他」には「食べた直後に気持ち悪くなった」、「車中で食べて嘔吐した」が3件、「給食で残せないことが嫌だった」が1件であった。

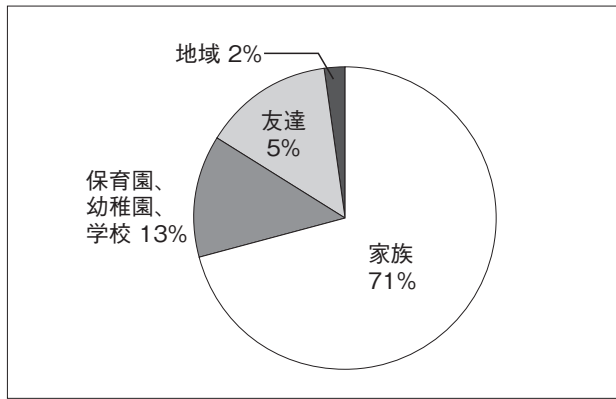


図2 感情表現表出に関する人・場 (N=63)

以上、「良い思い出」、「嫌な思い出」から、感情表現の表出の背景には、かかわる「人」や「場」があることがわかる。学生の記述で「人」、「場」を明記していたものは63件(61.7%)であった。「良い思い出」が59件(93.6%)、「嫌な思い出」が4件(6.3%)であった。これらを「家族」、「友人」、「保育園・幼稚園・学校」、「地域」に分類し、図2に示す。

分類上の「家族」は父母、祖父母、兄弟、従姉、家族、親と書かれているものとした。「保育園、幼稚園、学校」は特に「場」が思い出となっているものとし、「友達」を友達、仲よし、園のみんな等と書かれているものとした。それらの分類から「家族」が71.0%、「保育園、幼稚園、学校」が13.0%、「友達」が14.0%、「地域」が2.0%であった。

「家族」のうち、「母」が44.4%、「祖母」が17.7%、「父」が11.1%、「祖父」、「兄弟」は各々4.4%であった。父、母と明記されたものは約5割であり、祖父母、兄弟を合わせると8割弱であった。

「良い思い出」となった背景には家族が関わっており、記述には「楽しかった」の表現に加え、父母、祖父母にむけて「大好き」と書いている者もいた。「保育園、幼稚園、学校」、「地域」で体験したことで興味関心を持つようになったものには「嬉しい」、「楽しい」が書かれていた。

「嫌な思い出」の4件は、いずれも「保育園、幼稚園、学校」が該当していた。理由は「保育園で保育士に苦手なもの食べるよう指導された」、「学校給食に苦手なものが出ると辛かった」、「好き嫌が多いため給食は我慢して食べた」であった。

4. 感情表現が明記されてない記述について

先の分類で「その他」(24.5%)に該当する記述についてである。

明記はされてないものの「家族」のかかわりが感じられる記述が61.5%あった。思い出の食べ物を「母親の語

りから、自身の思い出の食べ物とした」が4件ある。「毎朝の思い出」、「風邪をひいたときの思い出」、「一番覚えていること」、「子どものころからずっと好きな食べ物」など、幼少期には家族がかかわらなければ食を獲得することが難しいとされる事柄が書かれている。「保育園、幼稚園、学校」は7.6%で「おかわりした料理の思い出」、「年度末に出るデザート」の思い出と給食の思い出を書いていた。その他に、「好きな食べ物」、「初めて食べた物」、「急に嫌いになった食べ物」と「子どもの頃、隣家に招かれた」を合わせると30.7%あった。

明記されていないが、それぞれの思い出の背景には「人」・「場」が関わっていることが伺われる。

5. グループワークからの考察

思い出の食べ物について、本学学生に各自の記述から「共通すること」をテーマに1グループ6~7名でディスカッションを行った。ディスカッションの時間は20分とした。

ディスカッションでは「良い思い出」は「自分で初めて作ってあげたもの」、「自分のために母親が食べさせてくれていた」、「友達や家族と一緒に作った料理」をあげていた。

「嫌な思い出」では「おとなしくさせるために食べさせられた」、「のどに詰まらせる」があげられていた。

学生たちから「思い出の理由には家族がいる」、「印象強い思い出に食べ物に関連している」、「子どものことを考えてくれるもの」、「覚えている食べ物は思い出が強く関連している」、「好き嫌いではないこと」、「良く食べたものでなく出来事が思い出の食べ物になっている」などを共通していることと上げていた。

そして、すべてのグループが、「良い思い出」は「誰かと一緒に作る」であるとまとめていた。また、同じ世代であっても、同じ食べ物であっても、A学生には「良い思い出」、B学生には「嫌な思い出」となっていることから、「個人差」があることに驚いたと補足していた。

IV. まとめ

本調査では「思い出の食べ物」は多様であった。「良い思い出」となっていた背景に、「人(家族、友達、場)」、「一緒(作る、体験する)」、「楽しい」をあげることができる。

前述している「保育所保育士指針」における食育の目標の中に、照らし合わせ、具体的に期待できる子どもの姿として、「①お腹のすくりズムのもてる子ども、②食べたいもの、好きなものが増える子ども、③一緒に食べたい人がいる子ども、④食事づくり、準備に関する子ども、

⑤「食べ物を話題にする子ども」³⁾の5項目が示されているが、「③一緒に食べたい人がいる子ども、④食事づくり、準備に関する子ども」の姿に相当する体験である。

さらに、「食べられなかったものが食べられたことが嬉しかった」というのは、「②食べたいもの、好きなものが増える子ども」の姿であるといえる。また、「⑤食べ物を話題にする子ども」の姿は、食への興味関心が促進されていた「良い思い出」となったものである。

「嫌な思い出」には、「強要」、「孤」、「不適切な食べ方」があげられる。「強要」は「保育園、学校の給食時に食べなければいけない」のように保育者の支援の在り方を園児として体験したものである。

「孤」は「友達が食べているのに食べられないことが辛い」等であるが、相対して、「みんなと食べられるようになったことが嬉しかった」としている者は「良い思い出」となっている。前述しているが、「食べられない給食に準じた弁当を作ってくれた」というのはまさに「孤」にさせない親の支援である。

「不適切な食べ方」としたのは「のどに引っかかった」、「食べた直後に嘔吐」等から、どこで誰とどのように食べていたのか。その年齢において適切な食べ方、調理の仕方があったのだろうか。生活リズムやマナー等の背景等があると想定される。

「嫌な思い出」を、期待できる子どもの姿と照らし合すと、「①お腹のすくりズムのもてる子ども、②食べたいもの、好きなものが増える子ども、③一緒に食べたい人がいる子ども」の視点がどうであったのか問われる。

本調査対象の学生はバブル終焉期の1990年以降に生まれている。「共食文化の崩壊」、「食の安全の揺らぎ(BSE、O-157食中毒発生)」⁴⁾という背景がある。

本調査から「人と人が一緒に食べ、共に作ることの楽しさ、喜び」という食育の根幹となる結果を得ることができた。これらの記述の分析は保育者として、食育を導入していく上での一助となるであろう。継続した調査を実施し、食育実践活動の基礎資料としていく。

参考文献

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課「保育所保育指針解説書」2008
- 2) 木下康仁、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ質的実証研究の再生―」弘文堂、2007
- 3) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～」2004
- 4) 安藤節子、「子供の食事・食育・発達」芽ばえ社、2006、p.123-126